

沿岸域集落における空間構成の特性

- 舟屋住居と集落空間の特性 -

日大生産工(院) 縣 真之介
日大生産工 宮崎 隆昌

1 研究背景と目的

我が国における多くの沿岸域集落は、磯・浜傍の非常に限られた領域内に存在し、非計画的に集落構成や家屋を変化させて形成された自然発生的集落である。そこでは、漁港・漁協・店舗・住居が密集しており、生産と生活の場が一体化した高密度集住空間となっている。

沿岸域集落に居住する住民の大部分は様々な型で展開している水産業(漁業)を主たる生業とし、地形・地理条件による制約を受けながらも特定な地区に集住し続けている。

本研究は、そのような自然発生的に形成された高密度な沿岸域集落を「建築計画」又は「都市計画」的な視点で分析することによって、空間構成の特性を把握し、今後の居住環境の集住形態、コミュニティ形成、空間特性を検討する基礎的資料としてまとめた。

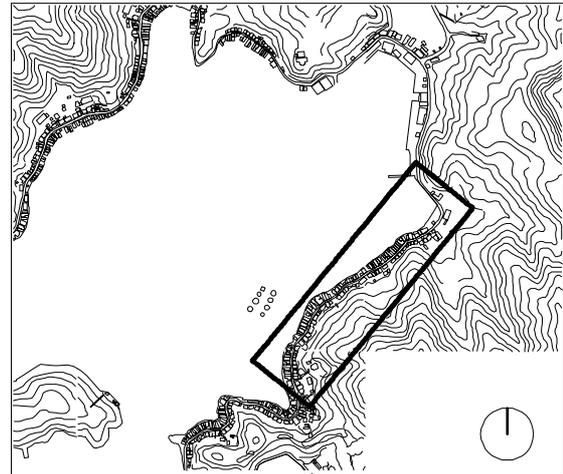


図1 研究対象地域の位置図(1/20,000)

2 研究概要

2-1 研究対象地域

京都府の北端、丹後半島の東北部に位置する伊根湾は、湾内に位置する青島の自然堤防と湾を囲む地形によって、穏やかな海面を形成している。その海沿いに位置する伊根沿岸域集落は、断崖とのわずかな空間に位置し、一本の道路を挟んで、宅地・耕地を展開させている。

山側には生活の場として用いられる主屋が軒を連ね、海側には舟の格納庫、出漁準備の作業場、漁具置き場、網干し場、住居を兼ねた舟屋や倉庫が立ち並んでいる。住民の多くは、道を挟んで離れとなっている主屋と舟屋の双方を所有している。

このような特異な集落構成を持つ伊根沿岸域集落の一地区を対象地として分析していく(図1)。

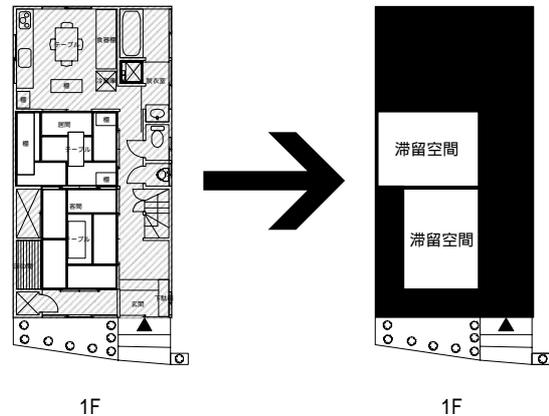


図2 滞留空間の抽出

2-2 研究方法

本研究では、調査によって得られた間取りを元に、住居内1階部分において長時間人間が容易に滞留する可能性のある空間(以下、「滞留空間」とする)を決定し、その空間構成を把握することによって対象地における住居内部と住居外部の関係性について考察する(図2)。

本報における滞留空間の定義は、個人がその空間に滞留しやすい空間であり、主に畳やフローリングの部屋を指す。その際、台所や廊下、風呂、トイレ、縁側、収納、床の間、廊下程度の幅(910mm以下)の空間は滞留空間に含まない。

The Characteristic of Space Composition in Coast Region Village
- The Characteristic of *Funaya* and village space -

Shinnosuke AGATA and Takamasa MIYAZAKI

2-3 分析方法

滞留空間の構成を把握するにあたり以下の分析を行う。

道路と住居との境界^{注1)}を決定し、そこからの滞留空間の距離分布を求める(図3)。

滞留空間の距離分布を、西出和彦氏による「人間同士の距離の分類」¹⁾と照らし合わせる^{注2)}(表1)。

道路に対する滞留空間の開口率を求める(図4)。

これらのデータを2つの住居構成(舟屋と主屋、舟屋兼主屋)にわけて分析していく。以下舟屋と主屋の構成をA-type、舟屋兼主屋の構成をB-typeとする(図5)。

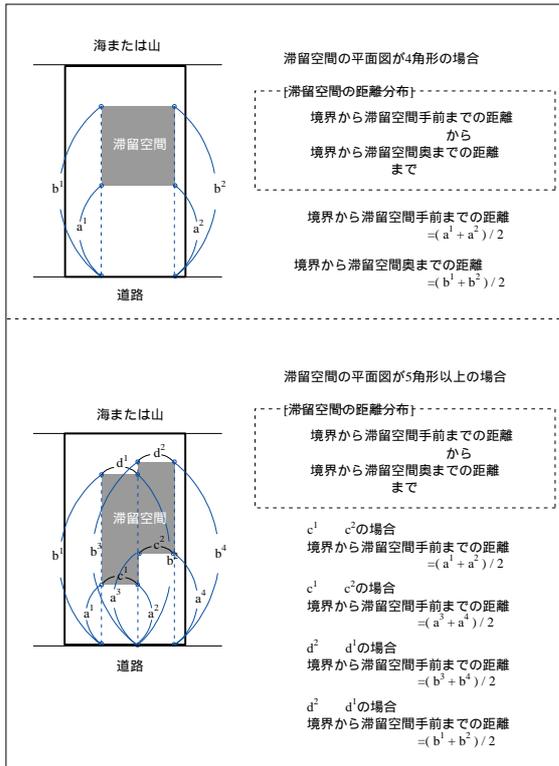


図3 距離分布の計算方法

3 分析結果

3-1 A-typeにおける滞留空間の距離分布

図7より、舟屋の滞留空間の距離分布は、排他域からの空間や相互認識域・遠方相など様々な距離に分布している。

図7より、主屋の滞留空間の距離分布は、手前と奥又は、手前と真ん中と奥というように2つ又は3つに部屋を分節している傾向が見られる。

SM6,7,9,10,11,12,17,20に見られるような部屋を手前と奥に分節する場合においては、排他域又は会話域から相互認識域・近接相に手前の空間を設け、相互認識域・近接相から相互認識域・遠方相に奥の空間を設けている。つまり、滞留空間が道路側に開口可能である場合において、手前の空間は、絶対に他人を入れたくない距離から会話程度のコミュニケーションを可能にする距離に位置している。また奥の空間は、同じ場合において、会話から挨拶程度のコミュニケーションを可能とする距離に位置している。

SM1,4,23に見られるような部屋を手前と真ん中と奥の3つに分節する場合においては、会話域又は空間共有域から相互認識域・近接相に手前の空間を設け、相互認識域・近接相から相互認識域・遠方相に真ん中の空間を設け、相互認識域・遠方相に奥の空間を設けている。つまり、滞留空間が道路側に開口可能である場合において、手前の空間は、近すぎて気づきを感じ距離から会話程度のコミュニケーションを可能にする距離に位置している。また真ん中の空間は、同じ場合において、会話から挨拶程度のコミュニケーションを可能とする距離に位置している。更に奥の空間は、同じ場合において、挨拶程度のコミュニケーションを可能とする距離に位置している。

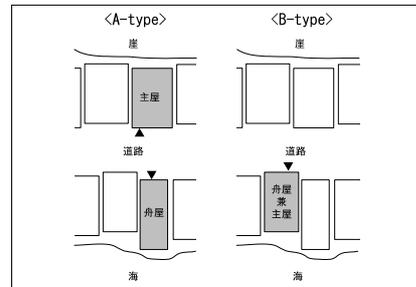


図5 住居構成のタイプ分け

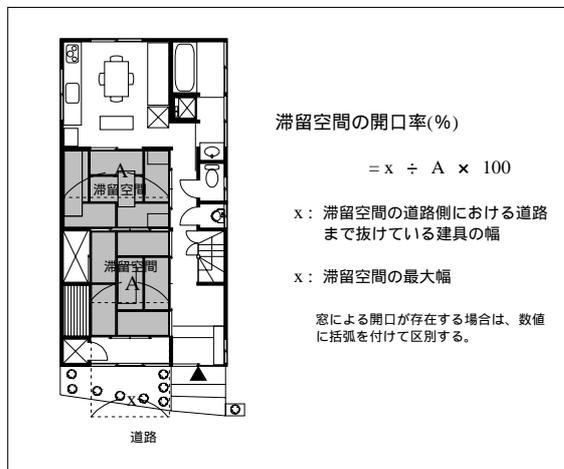


図4 開口率の計算方法

表1 人間同士の距離の分類¹⁾

距離	領域	特徴
接触 - 50 cm	排他域	・「すぐに離れたい」、通常は絶対的に他人を入れたくないという範囲 ・立ち話や列などで50 cm以内には近づかない ・Hallの密接距離に相当。多くの研究者が指摘するpersonal space
50 ~ (80) ~ 150 cm	会話域	・日常の会話が行われる距離の範囲 ・立ち話は50 ~ 80 cm程度、80 cm以上はややフォーマルな会話 ・会話をしない他人どうしにとっては近すぎて気づきを感じ距離 ・他人どうしの接近する1つの限界 ・Hallの個体距離に相当
1.5 ~ 3 m	空間共有域	・他人どうしでも「しばらくはこのままでよい」距離 ・他人どうしは視線を合わせているのが難しい距離 ・団集、会話、討論するグループのメンバーの最大距離 ・会話をしようと思えばできる距離、接近してきて話を始める距離 ・Hallの社会距離に相当
3 ~ 7 m	相互認識域・近接相	・相手を知人と認め、表情などもわかり、挨拶をかわし、話しかける距離 ・知人どうしが知らんぷりはできない距離 ・Hallの公衆距離に相当
7 ~ 20 m	相互認識域・遠方相	・相手を知人と認め、表情などもわかり、挨拶をかわし、話しかける距離
20 ~ 50 m	識別域	・相手が知人であることがわかる距離 ・ほとんど関わり合いにならずにすむ距離

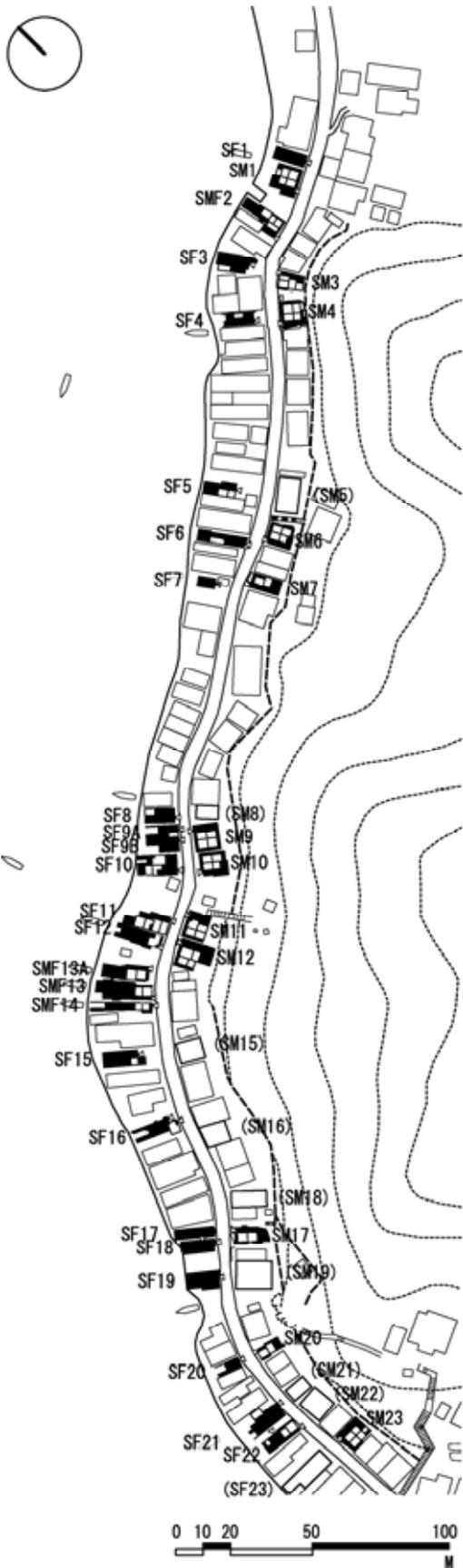


図6 対象地1階部分における滞留空間

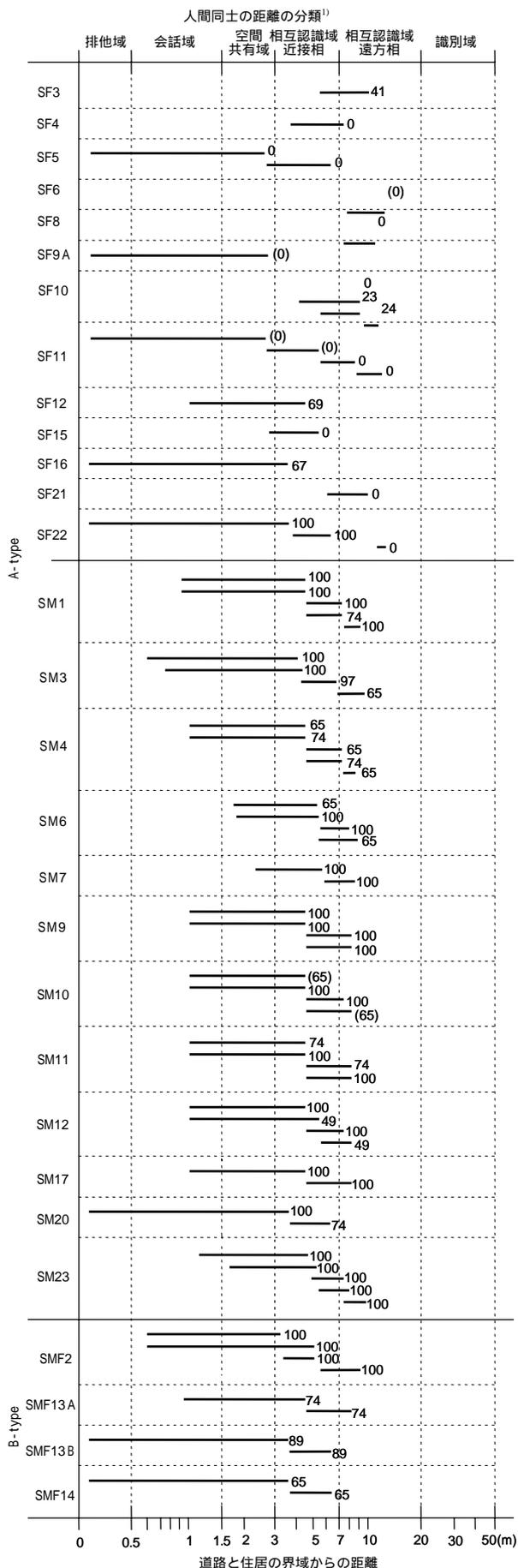


図7 滞留空間の距離分布と開口率(%)

3-2 A-typeにおける滞留空間の開口率

図7より、舟屋における滞留空間の開口率は0から100まで様々であるが、多くの舟屋が、開口率0%の部屋を所有している。

図7より、主屋における滞留空間の開口率は、SM12の49%を除いて、50%以上となっている。また、開口率100%の滞留空間が多く見られ、道路に近接した近隣住民との交流の発生確率が舟屋に比べて高い。

3-3 B-typeにおける滞留空間の距離分布

図7より、滞留空間の距離分布は、手前と奥に部屋を分節している傾向が見られる。

排他域又は会話域から相互認識域・近接相に手前の空間を設け、相互認識域・近接相又は相互認識近接相から相互認識域・遠方相に奥の空間を設けている。つまり、滞留空間が道路側に開口可能である場合において、手前の空間は、近すぎて気づまりを感じる距離から会話程度のコミュニケーションを可能にする距離に位置している。また奥の空間は、同じ場合において、会話から挨拶程度のコミュニケーションを可能とする距離に位置している。

A-typeにおける主屋の特徴と類似している。

3-4 B-typeにおける滞留空間の開口率

図7より、滞留空間の開口率は、すべて50%以上であり、開口率0%の滞留空間は存在していない。ゆえに、比較的、道路に近接した近隣住民との交流の発生確率が高いと言える。

A-typeにおける主屋の特徴と類似している。

4 まとめ

A-typeにおける主屋が道路の山側に軒を連ね、A-typeにおける舟屋とB-typeの舟屋兼主屋が海側に配置している傾向が強いことを考慮すると、図8のような滞留空間の空間構成が伊根沿岸域集落において成り立っていると考えられる。

本報のまとめを以下に示す。

- 1) A-typeの舟屋における滞留空間は、距離分布がランダムに配置されていながらも、開口率は低い傾向があり、より私的空間としての特性が強い。
- 2) A-typeにおける主屋やB-typeにおける舟屋兼主屋における滞留空間は手前と奥、又は手前と真ん中と奥といったように滞留空間を分節している傾向が強く、奥性を生み出している。一方で開口率は高く、会話や挨拶程度のコミュニケーションを発生させる距離に分布している傾向が強いことから、開口を作り出すことによって偶発的に、又は選択的に道路に近接した近隣住民との交流が発生する可能性が高い。
- 3) A-typeの舟屋と主屋による構成は、舟屋と主屋の滞留空間の質の違いにより、居住者による滞留空間の質の選択に伴って、道路を横断する機会を生み、道路を通る近隣住民との交流のきっかけを作り出す可能性を持っている。

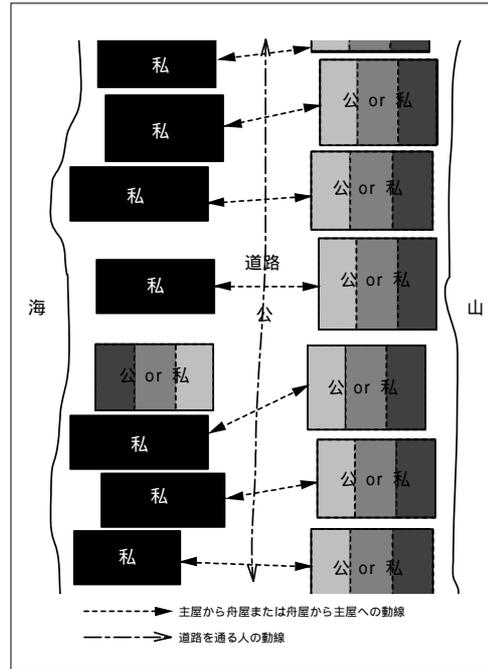


図8 伊根沿岸域集落の空間構成の概略

[注釈]

注1) 住居の道路に対する外壁と外部空間との境とする。なお、外部空間に2段以上の階段を設ける段差が存在している場合は、段差と道路の境を道路と住居との境とした。

注2) 本報における滞留空間の距離の分類は、道路と住居との境に人がいる場合のものである。

「参考文献」

- 1) 西出和彦, 人間集合が形成する空間とその認知, 人間・環境学会誌, 1(2), 1993.
- 2) 仙田満, 金城むつみ, 尾関昭之介, 建築の個体距離に関する研究 - 住宅のデザインコードと外部空間計画 -, 日本建築学会計画系論文集, No.423, 1991, pp.41 ~ 48.
- 3) 仙田満, 矢田努, 尾関昭之介, 住み手の意識からみた建築の個体距離 - 建築の個体距離に関する研究(その2) -, 日本建築学会計画系論文集, No.423, 1991, pp.41 ~ 48.
- 4) 金栄爽, 高橋鷹志, 密集住宅地の「住戸郡」における路地と隙間の役割に関する研究, 建築学会計画系論文集, No.469, 1995, pp.87 ~ 97.
- 5) 山本健司, 宮崎隆昌, 沿海集落における生活空間の構成上の特性と「距離感覚」に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.605, 2006, pp.31 ~ 38.
- 6) エドワード・ホール, かくれた次元, 日高敏隆, 佐藤信行訳, みすず書房, 1970.
- 7) 高橋鷹志, 長澤泰, 西出和彦, 環境と空間, 株式会社朝倉書店, 1997.
- 8) 伊根町・伊根町教育委員会, 「伊根浦伝統的建造物都保存対策調査報告書」, 2004.
- 9) G.T.ムーア, D.P.タトル, S.C.ハウエル, 環境デザイン学入門 - その導入課程と展望 -, 小林正美, 三浦研訳, 鹿島出版会, 1997.